

贖罪補遺

辻村 泰男

大へん立派な「世界盲人百科事典」が、皆さんの御協力で出来上って、日本や世界の盲界に貢献できたと共に、岩橋英行さんも、お父さんの武夫先生に、胸を張って報告できたであろうと、私も心からうれしく思います。

しかし私自身は、監修者などという立派な名目をいただきながら、いっこうにお役に立たず、心のうち忸怩たるものを察し得ません。殊に、地理的に離れた所に住んでいたため、十分な連絡もとれず、編集部の方々は実に忠実に書面で進捗状況などの報告は、その都度して下さったし、発行直前には分厚い校正刷をお送りいただいたりしたのですが、私自身が新しい仕事に忙殺されている最中だったので、時間をかけてゆっくり通読することもできない有様でした。監修の責任を十分に果たせなかったことを申し訳なく思っています。

しかし、出来上がったものは、私などの介入の必要もなかったほど立派なもので、今更ながら執筆者各位、編集担当者の御尽力に敬服するばかりです。

また、この完成に満足せず、これからも補遺を定期刊行されるという企てがある由で、これが本当に継続されれば、今回のこの百科事典の出版以上に賞揚されるべきことだと私は思います。補遺については、私も応分の努力をしたいと考えていますが、さし当って、今回できあがった事典を拾い読みしながら、気づいた一つのことを書き記したいと思います。

私が盲人問題にはじめて関係したのは、もう三十数年前、第二次世界大戦の前段階であった日中事変の戦傷失明傷疾軍人の保護事業でありました。

わが国の障害者援護事業は、戦争に関連して発達し、戦傷者を、一般障害者と区別して、殆んど前者のみ国の援護の手をさしのべ、後者を無視した形ですすめられました。そのことの歴史的な批判は十分に行われるべきですが、戦争中の戦争障害者に対する社会的な援護の技術が、戦後の障害者援護の再出発にあたって、一つの技術的な基礎になったという事実は卒直に認めるべきだと私は思っています。むろんこんにちでは、その基礎を踏み台にして、大きな発展をとげ、当時の技術がそのまま役に立っているという部分は、ほとんどないかも知れません。それは大へんに喜ばしいことでさえありますが、これから日本の障害者のための福祉事業が益々発展してゆく見透し

に立てば立つほど、その発展の歴史の道すじを明らかにすることが必要で、それには過去の事実が事実として記録されることが大切だと思います。

そういう点から、私は横田全治氏が執筆された「日本の盲人のあゆみ」の章は、非常に貴重なものだと思います。実に丸んねんによく調べられ、横田さんでなければ書けなかったものです。

ただ、この中にたった1カ所、昭和の戦争期についての記載に、次のような部分があります。

「澁州、日華両事案による戦傷失明軍人の教育所が1938年東京盲学校内に開設された。これは後年、国立光明寮となったもので、国立視力障害センターの前身である。」

これは誤ではありませんが、せっかくの記録ですから、一層正確を期すると、1938年には厚生省の外局として傷兵保護院が設置され、(のちの軍事保護院)その所管施設の一つとして、失明傷疾軍人寮と失明傷疾軍人教育所との二つが設けられた。前者は、現在の東京都文京区大塚の、お茶の水女子大学の一般教育棟の建っている場所に、木造二階建てで新設され、後者は当時の東京盲学校(現在の東京教育大学雑司が谷分校)の中に置かれたのであります。

そして後年国立光明寮になったのは、教育所の方ではなくて、失明傷疾軍人寮の方であります。

失明傷疾軍人寮は、はじめしばらく小川という陸軍大佐が寮長をやり、次いでこの百科事典に「戦傷失明者の職業」という項目を執筆されている千葉一正氏が寮長になられたのでした。

寮は、失明傷疾軍人の生活の場であり、ここで寮生は日常生活の訓練を受け、あんま・はりなど今日のいわゆる理療や邦楽の学習を希望する者は、ここから教育所まで通学する、ということになっていました。当時は東盲に限らず、盲学校の職業教育といえは、ほとんど理療に限られていたわけですから。

そこで、寮の方では軍事保護院と協力して、新職業の開拓にも力を注ぎ、当時はほかに見るべき工業がなかったのに、軍需工場の中に、組立工や旋盤工として就職させたり、またこの時もうすでに、ピアノ調律や、電話交換手の養成なども研究しました。このへんのことは、百科事典の千葉さんの記述を見て下さい。

これらの経験を通じて、盲人に新しい仕事をさせることは、それほど困難ではないし、盲人にできる仕事の方が盲人にできない仕事よりは多いということがわかり、それと同時に、身の自立とか歩行訓練などという基本的なことの方が一層大切であることもわかり、盲人歩行についての文献などを出しています。

こういう意味で、失明傷疾軍人教育所もさることながら、失明傷疾軍人寮の、わが国盲人援護事業に果たした役割は決して小さくはなかったのです。

ところが、この失明傷疾軍人寮については、今回の事典の索引には出て来ません。しかし、事典

の中に、失明傷疾軍人寮という文字は、前記千葉さんの記述(698頁)および年表(951頁、但しここには失明軍人寮と記されている。正確な名称は、失明傷疾軍人寮です)の2カ所に出て来ます。

だから索引の中に失明傷疾軍人寮という文字を入れておきたかった、という気がしきりにいたします。

以上、古いこと、どうでもよいことのようにですが、百科事典の正確さを期する意味から——そして私の監修の不十分であった責をつくなり意味で走り書きいたしました。

国立特殊教育総合研究所長